独立した作品としての歴代志

杉本 智 俊*

ABSTRACT Tomotoshi SUGIMOTO, *Chronicles as Independent Literature*: The Book of Chronicles has three aspects: the interpretation of Samuel-Kings, the history of Israel, and the Chronicler's own theology. To define its literary genre, it is essential to clarify how they relate to one another. Exegetical literature may deal with historical events or theological issues, but it must be in the end constrained by the sacred text. Historiography may reflect exegesis of the text or the author's theological view, but it must finally be controlled by historical events. Theological literature may make use of exegesis or historical report, but it is free from both in expressing the author's theology. In this article we discuss the first point: whether Chronicles is dependent on the text of Samuel-Kings, and if it is exegetical literature.

Firstly, we will deal with 1 Chr 18-20, where large portions of Samuel material (David's treatment of Mephibosheth, his sin with Bath Sheba, and rebellions against him by Abshalom and Sheba) are omitted. It is often explained that, though the Chronicler basically follows the text of Samuel-Kings, he attempts to conceal unfavourable parts of David. However, the Chronicler does include such accounts elsewhere (1 Chr 13, 21), and their absence can be better understood by his own thematic presentation of Saul-David and David-Solomon relationship. Moreover, in 1 Chr 18-20, David's victories are consciously collected from various parts of Samuel in order to constitute a literary unit. It is placed immediately after the Davidic Promise (1 Chr 17) to show the beginning of its fulfillment and God's blessing upon David.

Secondly, we will discuss additional materials in the reign of Jehoshaphat (2 Chr 17-20). They cannot be regarded as theological interpretation or expansion of Kings' text, because they are totally unrelated to it and the Chronicler's evaluation of Jehoshaphat is opposite. Rather

* 日本オリエント学会会員

these additions form the Chronicler's own retribitional pattern, and the Chronicler's control over the material is evident.

These analyses lead to a conclusion that Chronicles is essentially independent from the text of Samuel-Kings. Although the Chronicler uses the interpretation of the sacred text, he does so only as far as it is relevant to his theme. Therefore, Chronicles should not be seen as exegetical literature.

I. 序 論

旧約聖書歴代志がどのような性格の書物であるか、その文学的ジャンルは何だとみなされるべきであるかといった問題については、これまでの処確定された見解が存在していない。⁽¹⁾それは、歴代志が表面的にはイスラエルの歴史を記しているという印象を与えるにもかかわらず、旧約聖書中のもう一つの歴史書サムエル記・列王記を繰り返している部分が多く、この二者の関係が明らかでないからである。又、歴代志では全体的に独特な神学が色濃く反映されていて、これを歴史書と同定することに躊躇する者が少くないためでもある。こうした問題は、旧約聖書の著者が歴史というものをどう扱っていたのか、聖書の後代の作品がより初期の作品をどのように使用したのかといったことと密接に係わっており、旧約聖書の形成過程を知る上で避けて通ることのできない点である。

今世紀半ばまでの歴代志研究は、概してその歴史的信憑性を問うことに中心があった。デ・ヴェッテ、ヴェルハウゼンは歴代志の記述がモーセ五書の神学と非常によく合致するためにその信頼性を否定したのに対し、オルブライト等⁽²⁾は当時豊かになりつつあった考古資料を用いてそれを弁護した。けれども、フォン・ラート、ノートの伝承史批評による研究が発表されると、学会の大勢は歴代志の歴史的信憑性よりも歴代志家独自の「歴史像」に注目するようになった。⁽³⁾フォン・ラート、ノートは、歴代志は捕囚期後の特殊な社会的環境の中において独自の神学的目的のために描かれた歴史であると論じたのである。

以来、歴代志が「神学的歴史」であるということには一応の一致がみられるのだが、それが実際に何を意味するのかということに関しては激しい論議が続けられている。主な意見は基本的に三つに分けられると思われる。第一には、歴代志をサムエル記・列王記の解釈、注釈の書とする立場である。以前より歴代志をラビ文書におけるミドラシュの先駆とみなす意見が存在していたが、最

近のヴィリーの研究では歴代志全体をサムエル記・列王記の解釈 (Auslegung) であると定義づけている。⁽⁴⁾ ヴィリーは後代の読者が正典テキストを読む助けをすることがその著作目的であり、預言的歴史の「解釈」こそが捕囚後後期の共同体においては歴史記述の活動であったと論じる。第二にライトは、ミドラシュ的解釈法の使用を認めながらも、全体としては歴代志はサムエル記・列王記から独立した歴史文書であるとする。⁽⁵⁾ その文学構造がサムエル記・列王記に依存しておらず、これらは歴史資料として用いられていて解釈の対象とはされていないからである。ビッカーマンも同様、歴代志家の手法は当時の歴史記述の慣習に合っていると主張している。⁽⁶⁾ 第三の立場は、歴代志を独立の著作だとしながらも、その歴史的要素は著者の神学表現のための舞台設定にすぎないという説である。モシスは歴代志が審判の時、回復の時、栄化の時という独自のパラダイムの構造で構成されていることを示したが、その歴史性については一切ふれていない。⁽⁷⁾ ヴェルテンは、歴代志家によって付加された出来事が信頼できる歴史資料に基づいたものではなく、著者の立場から創作されたものであると論じ、歴代志は訓戒のために書かれた“freie parabolische Geschichtsdarstellung”⁽⁸⁾ だとしている。

これら三つの意見は、いずれも歴代志がイスラエルの歴史を扱い、サムエル記・列王記の解釈を用い、独自の神学を語っていることを否定していない。ただ、その相関関係のとらえ方のちがいから異った結論を導き出しているのである。だから、こうした三つの文学的ジャンルが互いにどう異っているのかをはっきり定めずに、歴代志を単に解釈の書であるとか、神学的著作だとか、歴史書だとか定義づけたとしても大した意味をなさない。むしろ、三つのジャンルを一つの原則にのっとって厳格に定義することによって、それらとの比較の内に歴代志における歴史、解釈、神学の係わりがはじめてはっきりしてくるものだと思うれる。

筆者は、スターンバーグが述べるように、文学的ジャンルはテキストに現われた著者の執筆の意図にもとづいて決定されるべきだと考える。⁽⁹⁾ つまり、歴代志家は正典を解釈しようとしていたのか、自身の歴史観を呈示しようとしていたのか、あるいは独立した神学を展開しようとしていたのかということである。解釈文書は、歴史的事件や神学的問題を扱うかもしれないが、最終的には正典のテキストによってその内容が決定されていなければならない。歴史文書は、テキストの解釈や著者の神学的意見を反映させるかもしれないが、究極的には

歴史的事件によって拘束されていなければならない。神学的文書は、テキスト解釈や歴史の記述を用いるかもしれないが、そのいずれにも支配されることがなく、著者の神学を表現することが最終的目的である。結局、歴代志家はテキストか歴史的事件によって自らの表現を限定しようとしたのか、あるいはそれらから自由であったのか、ということが問題である。

本稿では、この問題の内の第一の点、歴代志はサムエル記・列王記のテキストによって規定されていたのかどうかを論じたい。これは、歴代志家がサムエル記・列王記から自らの作品のための資料を選んだ方法にあらわれていると思われる。もし歴代志が解釈の書であったとするなら、それは本質的にサムエル記・列王記のテキストに基づいていないからである。本来のテキストが保持されている所では、それが解釈や神学的注釈の基礎として用いられているのか、新しい文学的コンテキストの中で異った働きをしているのかが問われなければならない。テキストが削除されている部分では、それが歴代志家のサムエル記・列王記全体の解釈と合わないからけずられたのか、新しい作品のために役立つ部分のみが意識的に選ばれた結果なのかが問われなければならない。新しい内容が加えられた所では、それらがテキストから発展させられたものなのか、著者自身の独自の目的のためにテキストとは無関係に含められたのかが問われなければならない。ここでは、歴代志家によってサムエル記・列王記のテキストが削られた箇所（「ダビデの戦勝の記録」歴代上18—20章）と新しい内容が加えられた部分（「ヨシャパテの治世」歴代下17—20章）の代表的な所を例にとって、こうした問題を論じていきたい。

II. ダビデの戦勝の記録（歴代上18—20章）

歴代志上18—20章とそれに対応するサムエル記の関係は以下の通りである（表1）。一見して明らかな様に、歴代志家はサムエル記のかなりの部分を省略している。これは、サムエル記のダビデ像をより理想的に解釈しようとした歴代志家が、自分の解釈とくいちがうダビデの陰の部分⁽¹⁰⁾を隠そうとしてなされた作業なのだとしばしば説明されている。サウル王家とダビデの確執、バテシバとの罪、ダビデに対する反乱は全てこうした解釈にとって不都合なので削られているが、やはり歴代志は基本的にサムエル記の記述にのっとっているというのである。けれども、この説は本当にテキストの現象を最も良く説明するものであろうか。

表 1

ダビデの戦勝の概略	歴代上18：1-13	／サム下8：1-14	ダビデの戦勝の概略
ダビデの家臣	歴代上18：14-17	／サム下8：15-18	ダビデの家臣
		サム下9：1-13	メピボセテへの慈悲
アンモン人との戦い	歴代上 19：1-20：3	／サム下10：1-11：1	アンモン人との戦い (Ⅰ)
		サム下11：2-27	ダビデとバテシバ
		サム下12：1-25	バテシバの子の死
		／サム下12：26-31	アンモン人との戦い (Ⅱ)
		サム下13-14	アムノンとアブサロム
		サム下15-19	アブサロムの反乱
		サム下20	シバの反乱
		サム下21：1-14	サウルの子孫の処刑
ペリシテ人との戦い	歴代上20：4-8	／サム下21：15-22	ペリシテ人との戦い

A

まず第一に、ダビデにとって否定的な事件がただそれだけの理由で削除されたということには、いくつかの大きな疑問が残る。たとえば、ダビデのメピボセテに対する態度（サム下9：1—13）、サウルの子孫たちの処刑（サム下21：1—14）は、ダビデが全イスラエルの王となる前にサウル王家との間に争いがあったことを暗示するので省略されたと言われている。確かに歴代志の構成では、サウルの死（サム上31章／歴代上10章）の前でダビデの台頭（サム上16—30章）の物語がとばされており、その後もダビデの即位までの間の事件（サム下1—4章）は含まれていない。しかし、ダビデとサウルの反目の期間の出来事（サム上16—30章）は歴代上12：1（9：35—40も参照）で言及されており、歴代志家がこれを一切隠蔽しようとしたとは考えにくい。むしろ歴代上10章では著者の関心がサウルとダビデの心理的、政治的な葛藤にあったのではなく、主を求めなかったサウルの最期を「型」として描くことにあったので、サウルの全生涯を扱わなかったのではないと思われる。

サウルの最期が「型」として描かれていることは、すでにモシス、アクロイド、ウィリアムソンによって指摘されている⁽¹¹⁾。歴代上10章は基本的にサム上31章に従っているが、10節ではさらしものにされたものが、サウルの死体から首に変えられている。これは、おそらく歴代志家がこの事件をサム上5：1—6と対比させようとしたためだと思われる。サム上5：1—6ではペリシテ人の

神ダゴンの首が契約の箱のせいで切り離されたことが記されており、歴代志家はサウルの罪も契約の箱を軽視したことだとしている(歴代上13: 3; 15: 29)。すなわち、主の契約の箱を恐れなかった者の首は切り離されるのだというパターンを暗示しているのである。この「首」のテーマは、さらにダビデのゴリアテに対する勝利(サム上17章)とも比較される。歴代志家は、サムエル記のイスラエルの都市ベテ・シャンとカナン人の女神アシュタロテに変えてダゴンの神殿への言及を新しく挿入している(10節)。ダビデがゴリアテの首をエルサレムに持ち帰ったのに対し、サウルの首はペリシテ人の神殿へ持ち帰られたのである。サウルはダビデと反対に主を求めなかったので、主から拒絶され、異邦人によって滅ぼされたのである。歴代志の独自の結論(13—14節)は、このサウルの罪をバビロン捕囚の理由「背信の罪(חילול)」と同一視しており(歴代上9: 1)、サウルの最期を、サウル物語の結論としてではなく、主を求めなかった者の運命の「型」として単独で用いていることを示している。そしてこのサウルの「型」は、これに続くダビデの主に従う者に与えられる祝福、滅びからの回復の「型」と対比をなしているのである(Ⅱ. B参照)。

同様に、ダビデとサウル王家の残りの者達との抗争(サム下1—4章)もダビデの理想的な姿を守るために省略されたとは考えられない。歴代上10: 14は、「それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた」と注釈しており、歴代志家がサウルの滅亡とダビデの即位の背後に神の御手があったことを示そうとしていることがわかる。⁽¹²⁾ 著者はこの二つの王朝の間の細々とした出来事を否定しているのではなく、それらは取るに足りないものであり、王朝交代をできるだけスムーズに描くことによって、その対比とそこにおける神の計画をよりはっきりと映し出せると考えているように思われる。事実、歴代上29: 26—27では、ダビデが統一王国の王となる前にヘブロンで7年間南王国の王であったことを認めている。

こうしたことから、歴代志家はダビデとサウル王家の確執を隠そうとしたというよりも、むしろ自身の目的に沿ってサウルの生涯の内の必要な部分のみを使用したと考えるべきだと思われる。だから、メビボセテについてもサウルの子孫の処刑についても、その事実を否定しようとしたとは考えられない。とりわけ、メビボセテに対してダビデは情けを見せており、もし歴代志家がテキストをダビデにとって好意的な立場から解釈しているだけなら、このような場面を省略したとは思えない。確かにメビボセテはサウルの孫であり、ダビデとヨ

ナタンの友情については言及されているが（サム下9：1，7），ダビデとサウル王家の反目に関する言及は一切見あたらない。ダビデがサウルの前を逃亡している時のことやヘブロンでの即位のことに言及している歴代志家が、メビボセテについてはふれることができないとは思えない。

同じ様に、バテシバの物語（サム下11—12章）が省かれたのも、それがダビデの罪を扱っているからだという理由だけでは不十分なように思われる。歴代上21章ではダビデの人口調査を行った罪を、13章では契約の箱を運ぶ時の失敗の様子を隠すことなく記しているからである。特に21章では、歴代志家自身がテキストに手を加えてダビデの罪を強調している。1節では人口調査の理由を「主の怒り」ではなく、「サタンの誘い」だとしている。3節では יְדַבֵּר 「望む」という動詞をより強い דַּבַּר 「要求する」に変え、ヨアブのダビデに対する謙讓表現をあからさまな非難へと変えている。3節の終わりには「なぜ、イスラエルに対し罪過ある者となられるのですか」という句まで加えている。7節も同様に「良心のとがめを感じた」から「このようなことをして大きな罪を犯しました」に変えられている。このように21章ではダビデの罪を認めるのにやぶさかでない歴代志家が、それだけの理由でバテシバの記事を除外したとは考えにくい。

アブサロムの反乱（サム下13—19章）とシバの反乱（サム下20章）も、ただそれがダビデにとって不幸であったからというだけではなく、むしろ歴代志家がダビデの治世とソロモンの治世をより密接に描こうとしたことからその間の出来事が割愛されたものと思われる。歴代上22—29章には、ダビデがソロモンに神殿建設の完成を命じている様子が書かれており、これが二人の共同の働きであったことが強調されている。実際、ダビデの治世の後半とソロモンの治世は、神殿建設のみに焦点があてられており、二人の治世全体がそれを軸に一体のものとして表現されているのである。⁽¹³⁾

歴代志家はまず、ダビデに対する約束（サム下7章）を独特に解釈する。歴代上22：8—9は、ダビデが神殿を建てることができなかったのは単なる歴史の偶然ではなく、彼が戦争に従事し、多くの血を流してきたためであり、その子ソロモンが「平和の人」として神殿を完成するために特別に選ばれたのだと強調する。サムエル記では、約束におけるダビデの世継ぎが誰をさすのかあいまいなままだが、歴代志家はそれがソロモンであり、彼によってダビデの王国がはじめて確立されるのだとする（歴代上22：9—10⁽¹⁴⁾）。こうした考えは、「安

息」が与えられてはじめて神殿を建てることのできるとする列王上5：17—19（邦訳3—5）に由来すると思われるが、歴代志家はこれを一層徹底し、結局神殿を建てられなかったダビデの時代には「安息」は与えられず、王国も確立されなかったとするのである。だから、本来のダビデに対する約束においても「安息」という言葉を用いないようにしている（歴代上17：1，10）。サム下7章では王国確立の約束はダビデに無条件で与えられ、ソロモンはその成就のために何もしていないが、後の列王記においてはソロモンやその後の王達はこの約束の条件に従ってさばかれて⁽¹⁵⁾いる。歴代志家はこうした緊張関係を、もともとの王国確立の約束が、ソロモンがはたして主に従うか、特に神殿を無事完成させるかにかかっていると解釈したのである。歴代上28：7ではこうした考えに沿ってダビデへの約束が書き直され、ソロモン以降では神殿の完成によって王国は永遠に確立されたとみなされている（歴代下6：41—42；7：12—22；13：5—8；21：7；23：3）。もちろん、神殿はソロモン一人で建てたものではなく、ダビデの計画があり、ダビデが資材を集めたのである（歴代上22：5；29：1）。けれどもダビデ自身は神殿を完成することができず（歴代上22：8；28：3）、王国確立のための二人の役割は相互補完的であったと解釈するのである。

さらに、ダビデがソロモンを神殿建設の職務へ任命する様子（歴代上22：11—13，16b；28：9—10，20—21）は、モーセがヨシュアに自分の職務の完成を命じた光景（ヨシュア1章）に倣って描かれて⁽¹⁶⁾いる。任命の言葉自体ヨシュア記と同じく三つの構成要素から成っている。励ましの言葉、職務規定、神が共にいて下さるという約束である。ヨシュア記1章と類似した表現も多用されている。四重の励ましの言葉「強くあれ、雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。」（歴代上22：13）、「主があなたとともにおられるように。」（歴代上22：16）、律法を守ることの強調（歴代上22：12，13；28：7，9）、繁栄の約束（歴代上22：13）等である。又、任命の言葉が二度繰り返されていること（歴代上22章と28章）もヨシュアの場合（申命31：14—15；ヨシュア1：2—9）と比べられる。歴代志家がこうした「予型論的技法」によってダビデとソロモンの関係を描いていることも、二人の治世を主の大きな働きを完成するための一つながりの治世として表現しようとしているためと考えられる。

このような歴代志家の立場から見ると、ダビデの治世とソロモンの治世

の間の王位継承物語中の事件（アブサロムの反乱等）は大きな意義を持たず、とりたてて二つの治世のつながりを破ってまで挿入されるべきものでなかったことが理解できる。

B

以上、歴代上18—20章で省略された箇所は、単にそれがダビデの陰の部分を取っているからではないということを見てきた。ここからは、むしろ18—20章が歴代志家によって意図的に集められた内容で構成されていることを見てみたい。

歴代上18—20のテキストは、サム下8：1—18；10：1—11：1；12：26—31；21：18—22と広範囲から採られているが、それらが全てダビデの戦勝の記録に限られていることが注目される。⁽¹⁷⁾

特にこれらの戦勝の記録がダビデへの約束（歴代上17章）の直後に置かれていることは、神が約束に従って王国確立への一步を始められたことを示している。確かに上述のように、この約束はソロモンの代になるまで完全に成就されることはなかったが、王国確立はダビデとソロモンの共同作業である。歴代上22：18—19には、ソロモンが「安息」を得て神殿建設をするためには、ダビデが戦いに勝ち平和を確立させねばならなかったことが述べられている。ダビデの戦勝の記録がこのコンテキストに集められているのは、すでに神が約束実現⁽¹⁸⁾の方向へ導いていることを示す意図的な文学技法であることがわかる。さらにダビデの約束の前には、ダビデが即位後すぐに契約の箱をエルサレムに運び入れたことが書かれている（歴代上13—16章）。⁽¹⁹⁾ ダビデの約束も戦勝もこうしたダビデの主を求める姿勢に対して与えられた祝福と見ることができる。サウルが契約の箱を無視したために主によって王権を奪われ、異邦人の手にかかって戦死したこととの対比は明らかである。

ダビデの戦勝の記録が意図的に集められたことは、18—20章自身の文学構造からも理解される。元来さまざまな目的のために用いられていたテキストが、歴代志家のテーマに直接結びつき、18—20章でひとまとまりとなるように細工されているからである。アンモン人との戦い（歴代下19：1—20：3）は、サムエル記ではパテシバ事件によって二つに分けられているが、歴代志家はパテシバに関する部分を完全にとばして戦勝の部分のみを結合している。しかも、後半の最初の三節（サム下12：26—28）は、勝利をダビデにではなくヨアブに帰しているので省略されている。ここでは勝利者ダビデがテーマであり、ヨアブはダビデの部下であったので、ヨアブに関する記述を削り、ダビデの戦勝の

物語として編集しているのである。同様に、四つのペリシテ人に対する戦いの内初めのもの（サム下21：15—17）はとりのぞかれ、歴代上20：8では「四人」という数字が省かれている。イスラエル軍はこの戦いにも勝ったのだが、15節で「ダビデは疲れていた」と言われており、17節ではダビデの家来達がダビデにこれ以上戦わないように勧めている。こうした表現は、ダビデが圧倒的な勝利を収めたという印象を弱めるので省かれたものと思われる。

このように18—20章は、歴代志家が意識的に自分のテーマに沿って選んだ内容で構成されていることがわかる。サムエル記から採られた部分も新しいコンテキストの中で別の目的のために用いられている。最終的に現われてくるダビデ像は確かに理想化されているが、それは単にサムエル記中のダビデにとって不都合な部分を削ったからというよりも、むしろ積極的に歴代志家が自分の独自の視点から資料を選んで描いたためだと見るべきだろう。

III. ヨシャパテの治世（歴代下17—20章）

歴代志家が新しい内容を加えた所も省略した所同様、サムエル記・列王記を解釈したというよりも独自の作品を書くために付加したものであることがわかる。列王記ではヨシャパテは北王国の王との関連でしか登場しないが、歴代志家は大量に新しい内容を加えることによって、ヨシャパテを代表的な敬虔な王⁽²⁰⁾にしている（表2）。ヨシャパテのアハブとの同盟は列王上22章では正しくないこととみなされ、歴代志家も同じ立場を取っているようだが（歴代下19：1—3参照）、歴代志全体としては付加された内容のおかげで彼は大変高く評価されている（歴代下20：30, 32, 21：12；22：9も参照）。

歴代志家は、列王上22章を繰り返す前に、ヨシャパテの治世の総括を17章で

表 2

ヨシャパテの宗教改革 歴代下17：1-19 (I)と祝福		
アハブとの同盟	歴代下18：1-19：3	／／列王上22：1-40 アハブとの同盟
ヨシャパテの宗教改革 歴代下19：4-11 (II)		
モアブ人に対する勝利 歴代下20：1-30		
ヨシャパテの治世のまとめ	歴代下20：31-37	／／列王上22：41-50 ヨシャパテの治世のまとめ (列王下3：1-27 イスラエルとモアブの戦い)

している。序論的1—6節は、善は報いられるという正の因果応報のパターンを打ち出している。彼の治世は「その父の神に求めて、その戒めに歩んだ」と要約されており(3b—4節)、主によって王国が確立されたこと(3a, 5節)と富と誇れが与えられたこと(5節)とに結びつけられている。続く段落では律法の教師達が全国に派遣されたことが列王記に基づかずに加えられ、ヨシャパテの敬虔さを示している(7—9節)。そしてそれに主からの祝福、富と誇れ(10—13a節)、強固な軍隊と城塞(16b—19節)が序論の通り伴ったことが書かれている。10節は因果応報のパターンを「主の恐れが、ユダの回りの地のすべての王国に臨んだため」と説明している。こうした17章の内容は列王記のどこにも見あたらず、正の因果応報のパターンは列王記の敗戦の記述から派生したとは思われない。ここで歴代志家が列王記と無関係の内容を自身の目的のために導入したことは明らかである。

歴代下18章は、列王上22章にのっとってヨシャパテとアハブの同盟を扱っているが、ディラードが指摘する通り「以前からの伝承を自分の関心のために用いている」⁽²¹⁾。列王記はアハブの死の預言が成就したことをこの物語の結論としているのに対し(列王上22: 36—39)、歴代志家は自分自身の結論をこれと入れ換えて、ヨシャパテが外国軍と同盟したことを非難している(歴代下19: 1—3)。一般的には、歴代志家はヨシャパテをアハブと比べて肯定的に描きなかったのだと言われているが(18: 4参照)、これは19: 1—3と矛盾する。むしろこの箇所のは、主への信仰の欠如と外国への依頼心が悲劇を招くことを示すことにあったと思われる。続く二つの章では、ヨシャパテの信仰的な行動によって主の怒りがある程度避けられたことが書かれており、この章は失敗からの回復の道を描くための伏線となっている。歴代志家は段落の始まる部分にも手を加えて、この物語が自身の文学構造に合うようにしている。列王上22: 1では事件はイスラエルとアラムの間の戦争とされているが、歴代下18: 1—2はそれをヨシャパテの立場から書き直し、彼がより積極的な役割を果たしたようにしている。

歴代下19—20章は歴代志独自のものであって、再びヨシャパテを正の因果応報のパターンで描いている。19章がヨシャパテの宗教改革の第二段階を表しているのに続いて、20章では劇的な勝利が与えられているからである。ヴェルハウゼンはヨシャパテの宗教改革は彼の名前「主は裁かれる」から発展させられたものだと論じたが、⁽²²⁾現在ではこの説は一般に受け入れられていない。むしろ

歴代志家は4節の序論だけ自分で書き、それ以降では一般の記録文書を用いてヨシャパテの敬虔さを表現したのではないと思われる。4節では歴代志家特有の「ベエルシバからエフライムの山地まで」、「先祖たちの神」といった表現が用いられているのに対して、5節以下ではそういう特徴的な表現は一切見あたらないからである。又、4節は「それから、彼はもう1度……民の中へ出て行き、彼らを父祖の神、主に立ち返らせた。」と書いているが、残りの部分には宗教色が全く見られない。フィリップスとクニエリムは、部族に基づいた司法制度が、遅くともイザヤの時代までには中央集権的な体制に変化していることを指摘しており、こうした改革がヨシャパテの治世に起ったことは大いにあり得ることである。⁽²³⁾

続く20章のモアブ人に対する勝利も、列王下3章のミドラシュだという説もないわけではないが、おそらく歴代志家が歴史資料にもとづいて新しく書いたものと思われる。20章も列王下3章もヨシャパテのモアブに対する勝利を記しているが、その描写にはほとんど共通点がない。ノートとルドルフは、ハザゾン・タマル（2節）、デズの上り道、エルエルの野の東、谷の端（16節）、野のものみやぐら（24節）、ベラカの谷（26節）等の地名は、あまりよく知られていないものにもかかわらず死海周辺の状況とよく合致するため、歴代志家のミドラシュ的創作というよりも歴史資料を反映していると考えべきだとしている。⁽²⁴⁾ 2節の「ハザゾン・タマル（すなわちエンゲデ）」、26節の「今日までベラカの谷と呼んでいる」といった表現も歴代史家が受け継いだ資料を編集していることを示していると思われる。⁽²⁵⁾

いずれにしても、歴代志家はここで二つの新資料を用いて、ヨシャパテの主を求める姿勢が勝利で報いられるというパターンをつくり出しているのである。ヨシャパテの信仰心は宗教改革の他、戦いにおける「主を求めた」という表現（20：3、4）、祈り（5—12節）、戦いの前の礼拝（18—21節）等に表示されている。これに応答する主の救いの託宣はヤハジエルを通して与えられており（14—17節）、勝利の様子も聖戦の型にのっとって描かれている（22—29節）。こうしたヨシャパテの態度は明らかに18章の戦いの反転であり、彼の運命をさばきから平穏へと変えるものだった（30節）。このような因果応報のパターンは、列王上22章の神学的解釈とも列王下3章のそれとも考えることはできない。歴代志家は新しいヨシャパテ像を表現するために新しい資料を用い、独自の文学構造にあてはめたのである。

IV. 結 論

これまで見てきたことから明らかなように、歴代志家はサムエル記・列王記を資料として使いながらも、それに本質的には依存してはいない。むしろ、独自の作品を書くために、独自の視点から適当な部分を選択したと言える。含まれなかった部分は不都合なので削られたというよりも、歴代志家のテーマに直接貢献しないので使用されなかったものであり、新しく加えられた部分もサムエル記・列王記の神学的展開というよりも、独自のテーマを提起するために用いられている。そのまま繰り返されている所でさえ、新しいコンテキストの中で新しい役割が与えられている。こうしたことから、歴代志はサムエル記・列王記の解釈を利用してはいるが、それ自身を解釈の書とみなすことには無理があると思われる。歴代志が歴史書であるか神学書であるかは次の段階の研究のテーマとなるだろうが、本稿では、それが少なくともサムエル記・列王記のテキストから独立した作品として書かれていることが明らかになった。

注

- (1) 歴代志一般に関する研究史は、S. Japhet, “The Historical Reliability of Chronicles,” *Journal for the Study of the Old Testament* (以下 *JSOT*) 33, 1985, pp. 83–107; T. Willi, *Die Chronik als Auslegung FRALNT* 106, Göttingen, 1972, pp. 9–47; H. G. M. Williamson による英訳 M. Noth, *The Chronicler's History*, Sheffield, 1987 の “Introduction”, pp. 11–26 を参照。
- (2) W. de Wette, *Beiträge zur Einleitung in das Alte Testament, vol. 1. Kritischen Versuch über die Glaubwürdigkeit der Bücher Chronik, mit Hinsicht auf die Geschichte der Mosaischen Bücher und Gesetzgebung; Ein Nachtrag zu den Vaterschen Untersuchungen über den Pentateuch*, Halle, 1806; J. Wellhausen, *Prolegomena to the History of Israel*, S. Black 及び A. Menzies 英訳, Edinburgh, 1885, pp. 171–227. W. F. Albright の立場については, “The Date and Personality of the Chronicler”, *Journal of Biblical Literature* (以下 *JBL*) 40, 1921, pp. 104–24; “The Judicial Reform of Jehoshaphat,” *Alexander Marx Jubilee Volume*, New York, 1950, pp. 61–82 を見よ。
- (3) G. von Rad, *Das Geschichtsbild des chronistischen Werkes*, BWANT 54, Stuttgart, 1930, pp. 121–33; M. Noth, *Überlieferungsgeschichtliche Studien*, Tübingen, 1943, ²1957. Noth の内、申命記史に関する前半は *The Deuteronomistic History*, Sheffield, 1981 として英訳されており、歴代志に関する後半も注1のように最近 Williamson によって英訳された。
- (4) Willi については注1参照。その他、歴代志のミドラシュ的色彩は、W. E. Barnes, “Chronicles a Targum,” *Expository Times* 8, 1896–7, pp. 316–19; “The Midrashic Elements in Chronicles,” *The Expositor*, 5th series 4, 1896, pp. 426–39; J. Weingreen, “Exposition in the Old Testament and In Rabbinic Literature,” *Promise and*

- Fulfilment*, Edinburgh, 1963, pp. 187–201; R. Bloch, “Midrash”, *Supplément au Dictionnaire de la Bible*, vol. V, cols. 1263–80; G. Vermes, “Bible and Midrash: Early Old Testament Exegesis,” *Cambridge History of the Bible*, I, 1970, pp. 199–231; I. L. Seeligmann, “Voraussetzungen der Midraschexegese” *Supplements to Vetus Testamentum* 1, 1956, pp. 150–81 等に指摘されている。
- (5) A. Wright, “The Literary Genre Midrash”, *Catholic Biblical Quarterly* 28, 1966, pp. 105–38; 417–57.
- (6) E. Bickerman, *From Ezra to the Last of the Maccabees*, New York, 1962, pp. 21–26.
- (7) R. Mosis, *Untersuchungen zur Theologie des chronistischen Geschichtswerkes*, Freiburg, 1973.
- (8) P. Welten, *Geschichte und Geschichtsdarstellung in den Chronikbüchern*, WMANT 42, Neukirchen, 1973, p. 206.
- (9) M. Sternberg, *The Poetics of Biblical Narrative: Ideological Literature and the Drama of Reading*, Bloomington, 1987, pp. 1–57.
- (10) 最近の研究では、例えば S. L. McKenzie, *The Chronicler's Use of the Deuteronomistic History*, HSM 33 (Atlanta: 1985), pp. 36–37; R. Braun, 1. *Chronicles*, WBC, Waco, 1987, pp. 201–202.
- (11) Mosis, 注 7 前掲書 pp. 17–43; P. Ackroyd, “The Chronicler as Exegete,” *JSOT* 2, 1977, pp. 3–9; H. G. M. Williamson, 1 and 2 *Chronicles*, NCB, London, 1982, pp. 92–96.
- (12) 聖書本文の邦訳は、口語訳聖書（日本聖書協会）及び新改訳聖書（日本聖書刊行会）から適当なものを選んだ。
- (13) ダビデの治世の後半については、Williamson, 1 and 2 *Chronicles*, p. 132 を、ソロモンの治世については R. Dillard, 2 *Chronicles*, Waco, 1986, pp. 5–6; 9 を見よ。
- (14) 歴代志家によるダビデ契約の解釈については、H. G. M. Williamson, “Eschatology in Chronicles”, *Tyndale Bulletin* 28, 1977, pp. 115–54 参照。
- (15) Williamson, “Eschatology”, p. 141.
- (16) N. Lohfink, “Die deuteronomistische Darstellung des Übergangs der Führung Israels von Moses auf Josue. Ein Beitrag zur alttestamentlichen Theologie des Amtes,” *Scholastic* 37, 1962, pp. 32–44; R. Braun, “Solomon, the Chosen Temple Builder: The Significance of 1 Chr 22, 28 and 29 for the Theology of Chronicles,” *JBL* 95, 1976, pp. 581–90; “Solomonic Apologetic in Chronicles,” *JBL* 92, 1973, pp. 503–16. H. G. M. Williamson, “The Accession of Solomon in the Books of Chronicles,” *Vetus Testamentum* 26, 1976, pp. 351–61 も参照。
- (17) ダビデの家臣達（歴代上18: 14–17）はダビデの戦勝のために重要な働きをしており、ここでは18: 1–13の一部として含まれていると考えられる。
- (18) 同時にこれは、22章以降で述べられるダビデが多くの血を流したために神殿が建てられなかったことの伏線となっている。けれども、ここではまだそのような負の意味合いは明らかになっていないので、基本的にダビデの信仰に対する祝福を表す役割

を果していると言える。

- (19) 歴代志家は、ダビデの契約の箱移転の記述（歴代上13：1—16：43）も改変して、これをダビデの即位後最初の仕事として記している。しかもダビデは一回目の移転の失敗後も、引き続いて契約の箱に関心を持っていたように描かれている。
- (20) ヨシャパテは列王上22：1—40でアハブとともに、22：41—50でアハジヤの海運業との関連で、そして列王下3：1—27ではヨラムの対モアブ戦との係わりで登場している。
- (21) “[the Chronicler] has taken a previous unit of tradition into the service of his own interest”. Dillard, 注16前掲書, p. 140.
- (22) Wellhausen, 注2前掲書 p. 191. Williamson, *1 and 2 Chronicles*, pp. 287–89 参照。
- (23) A. Phillips, *Ancient Israel's Criminal Law*, Oxford, 1970, pp. 18 ff; R. Knierim, “Exodus 18 und die Neuordnung der mosaischen Gerichtsbarkeit,” *Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft* 73, 1961, pp. 146–71.
- (24) M. Noth, “Eine palästinische Lokalüberlieferung in 2 Chr. 20,” *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 67, 1945, pp. 45–71; W. Rudolph, *Chronikbücher*, HAT 1 / 21, Tübingen, 1955, p. 259. Rudolph の立場は Myers, (*I and II Chronicles*, AB, Garden City, 1965, pp. 114–115), Petersen (*Late Israelite Prophecy*, Missoula, 1977, pp. 70–71), Williamson (*1 and 2 Chronicles*, pp. 292–93), Dillard (注6前掲書 p. 154) 等で受け入れられている。
- (25) Williamson, *1 and 2 Chronicles*, p. 293 参照。